2013秋フランス写真事情

報告者　日本カメラ博物館 運営委員　市川泰憲

■はじめに

ダゲレオタイプなど写真術発祥の国であるフランス。近年は、毎年7月にアルルの町で開かれる「アルル国際写真フェスティバル（Arles Photography Festival＝Les Rencontres d'Arles」や、パリで開かれるパリフォト（PARIS PHOTO）などが写真を志す若い人々に人気だ。2013年11月のパリは、パリフォトなどが開催され、さながら写真月間ともいえるほどだった。

その時期に開かれたイベントを順を追って列記すると、11月7～11日までパリ・エキスポ、ポルポトベルサイユで「サロン・ド・ラ・フォト（Salon de la Photo)」、14～17日はグラン・パレで「パリフォト（PARIS PHOTO)」、15～17日にはルーブル・カローセルでフォトフィーバー（fotofever)」というわけで、これらを限られた時間だが訪問し、併せてパリ市内の「ヨーロッパ写真美術館」、「アンリ－カルティエ・ブレッソン財団」美術館なども見学してきたので、以下に報告しよう。

■サロン・ド・ラ・フォト

サロン・ド・ラ・フォトは、日本で毎年横浜で開催される“CP＋”のようなカメラ機材中心のショーだ。この時期パリを訪れる人はパリフォトへの参加が大半で、サロン・ド・ラ・フォトを見学という人はきわめて少数派となる。

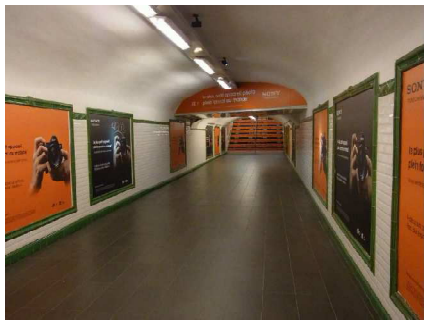
ヨーロッパにおけるカメラ機材のショーは、もともとドイツ・ケルンで開かれるフォトキナがよく知られているが、パリのサロン・ド・ラ・フォトは80年以上も歴史があり、過去にしばらくは偶数年がフォトキナ、奇数年がサロン・ド・ラ・フォトというように開催を分け合ってきたり、休止した時期もあったようだが、ここ数年サロン・ド・ラ・フォトは、毎年開かれるようになった。

サロン・ド・ラ・フォトは、フランスの写真業界団体SIPEC（Syndicat des entreprises de l'Image,de la Photo Et de la Communication：写真とイメージコミュニケーション事業の団体）が主催するもので、日本だとカメラ映像機器工業会（CIPA）がそれに相当することになる。

サロン・ド・ラ・フォトの開かれているパリ・エキスポ、ポルポトベルサイユへは、地下鉄で行ける。ポルポトベルサイユ駅に到着すると、ホームを降りて、地上に上がるまでに、日本のソニーが地下道、階段にこの時期新発売となるα7とα7Rの広告が他社を排して、これでもかこれでもかとばかりに黒とオレンジ色の広告が多数迫ってくる。

地下鉄構内なので、まだ会場のパリエキスポは見えないが、サロン・ド・ラ・フォトへの期待は一気に高まる。そして、ソニーのスチルカメラがフランスでどのようポジションにあるのだろうか、興味は尽きない。

事前に事務局から受け取ったサロン・ド・ラ・フォトの入場券は、Professionalと分類されており、日本でいうディーラー、プロ、学生などと分



サロン・ド・ラ・フォトへの下車駅である地下鉄ポルポトベルサイユ駅構内はソニーα7の広告一色で固められていた

朝一番にパリエキスポ会場に入ったが、ホテルを出るときは前日の雨が残っていたのがうそのような青空になった

パリエキスポの展示会場。いくつかの棟に分かれているようだが、この棟１つでサロン・ド・ラ・フォトが開催された。横浜のＣＰ+ の会場より少し狭いそうだ

現在のサロン・ド・ラ・フォトへ続く歴代のポスター（１）

現在のサロン・ド・ラ・フォトへ続く歴代のポスター（２）

類されているのと同様で、会期中の通し券となっている。受付で出入りのたびにバーコードリーダーで履歴を読み込まれるが、日本とは異なり、かなり細かな入場者の分析が即座にできるのではないかと考えた。

会場に入り、CIPEC 事務局責任者の Prove 氏を訪問し、サロン・ド・ラ・フォトの歴史、概要などを聞いた。Prove 氏はシグマフランスのゼネラルマネージャーが本来の仕事だ。会場入り口わきのこじんまりとしたスペースの事務局には女性が１人常駐している。隣はプレスセンターだが、マスコミ関係者が１人PCを前に作業していた。サロン・ド・ラ・フォトはすでにスタートしているので、現地のマスコミ関係者の利用は初日に集中したのだろう。

出展されている各社ブースは、キヤノン、ニコン、ソニー、富士フイルム、リコー、シグマ、タムロンなどが大きく中央の面積を占めているのは、日本の CP ＋などと大きな違いはなく、さらにアドビ、ライカカメラ、サムスン、地元の販売代理店などがブースを構えているのが、出展企業としての違いだ。このほか、会場内には、多くのスペースを割いて複数の写真展示コーナーがあったり、写真集やカメラのノウハウ本を主とした書籍販売コーナー、さらには生牡蠣を食べさせるレストランコーナーなどがあるのが、日本とは文化の違いを感じさせられた。

なお、このサロン・ド・ラ・フォトと横浜で開かれる「CP＋」は姉妹関係にあり、それぞれのホームページトップにはそれぞれのバナーが張り付けてある。会期中に「ZOOMS」と呼ばれる写真コンテ

会場内の見取り図。これをご覧いただければ、日本のＣＰ＋より少しだけ、会場の面積が狭いのを感じ取っていただけるのではないだろうか

サロン・ド・ラ・フォト2013 のポスター

会場全体でかなり写真展示のスペースに割かれている

ストでフランスのマスコミと一般投票にて選ばれた写真家2人と写真雑誌編集者と会う機会があった。入選者のうち1人は、ZOOM de la Presse PHOTO で選考されたJerome Blin氏で、もう1人はZOOM du PUBLIC/ZOOM de la Presse PHOTOで選考されたRomain Laurendeau 氏だ。2人の作品は会場に、20点ずつ飾られている。ちなみに一般投票で選考されたRomain Laurendeau氏への投票数は28,828票。今回はそのごほうびで、横浜で開かれるCP+2014に2人が招待され、作品展示が行われる。

サロン・ド・ラ・フォトの会場は横浜のCP＋より少し展示面積は小さいが、会期中は地元フランスの用品メーカーや販売店、日本のカメラ・レンズメーカーなども多数出展して連日盛況だった。

会場内には写真展示コーナーも複数設けられ、さらに広いスペースで写真集や写真撮影のノウハウ本の販売が行われ、にぎわっていたのが大変印象的で、休日には親子連れも多く、ここでも日本と写真文化の違いを少なからず感じた。

CIPEC事務局のProve氏とHeraud氏によると、2013年のサロン・ド・ラ・フォトの最終的な入場者数は85,526人であり、前年比6.1%増であるという。この増加は、若い人たちの入場が増えていることに起因すると分析していた。

<関連URL>http://www.lesalondelaphoto.com/

ヨーロッパ写真美術館コレクションのハリウッドスター展
（リチャード・アベドンの撮ったマリリン・モンロー）

左からCP+2014のときに訪日するSylvie Hugus氏（編集者）とフォトグラファーのRomain Laurendeau氏、Jerome Blin氏

キヤノンブース

ニコンブース

オリンパスブース

富士フイルムブース

ソニーブース

リコーブース

シグマブース

タムロンブース

フランスの写真企業としては数少ないＫＩＳ フォト社のブース。このほかにインクジェットペーパーのcanson、フィルターのcokin 社などがフランスのメーカーであるが、最近cokin 社は日本のケンコー・トキナーの傘下にあるという

ドイツ・テテナール社のブース。フィルムはコダック社のものを使うようだが、黒白バライタ印画紙や現像液などはいまもテテナール社が製造している

会期中写真家によるセミナーが18 回開催される

ライカフランス社は、新型のライカＭ の模型でゲートを作り、ライカ誕生100 年を記念して歴代のカメラを並べたり、写真家100 人のサインを紹介

写真集を中心とした書籍販売のコーナー。その混雑ぶりは日本ではとうてい考えられない

カメラやレタッチソフトの使い方を紹介した書籍の販売コーナー。みな真剣に眺めている

平日でもヨーロッパ写真美術館前はにぎわっていた

地下鉄サンポール駅前の写真美術館案内板

■ヨーロッパ写真美術館

ヨーロッパ写真美術館（Maison Europeenne de la Photographie）は、地下鉄サンポール駅からわずか数分の場所にある。建物は、18 世紀に建てられた貴族の邸宅に住人が 1 人であったので、パリ市が買い上げて美術館に改装したという。

コンテンポラリーな写真をたくさん収蔵しており、先述のサロン・ド・ラ・フォトでも「ヨーロッパ写真美術館」としてコーナーを設け、コレクションを展示していた。

訪問した時期の特別展は、日本でもなじみ深いブラジル生まれでパリ在住の“セバスチャン・サルガド”の『GENESIS』などの作品展示が幅広いスペースを使って行われており、その迫力ある大型のモノクローム作品群に、写真の価値が素材ではなく、あくまでも写された被写体そのものであり、写真作品の持つ意義を改めて考えさせられた。

博物館には、写真展以外にも写真集などを収蔵するライブラリー、作品や作家に関する映像資料も多数収蔵されており、自由に閲覧することができるという。

ヨーロッパ写真美術館には 12 日（火曜日）と 13 日（水曜日）の 2 回訪れたが、月・火曜日は休館日である。訪問初日は休館日であったが、館長のジャン＝リュック・モンテロッソ氏の案内で、数ある展示室を含めて、図書収蔵閲覧室、AV 資料閲覧室、さらには写真収蔵庫を含めたバックヤード全般まで見学させてもらった。

2 回目に訪れた 13 日（水曜日）は美術館は開館日だが、帰りに入り口を見ると、夕方とはいえ、かなりの人が建物の外に並んで待っていた。毎週水曜日は 17：00 から無料で入館できるので、それを待つ人のようだ。

ヨーロッパ写真美術館受付脇の案内板

館長のジャン＝リュック・モンテロッソ氏

なおモンテロッソ氏は、CP＋2014 へ、ゲストスピーカーとして招かれ「アートとしての写真とその価値」という題で講演している。

<関連 URL>http://www.mep-fr.org/

元貴族の館だけに、展示室をつなぐ階段や通路は格調高い

館の案内などは通路を仕切って展示されている

図書収蔵棚。日本人作家の写真集も数多く収蔵されている

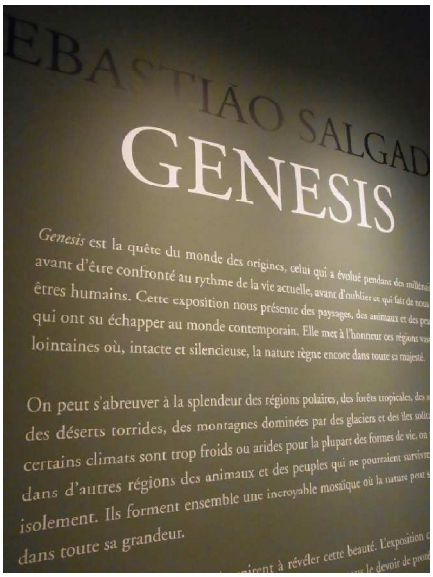
日本人写真家細江英公氏の写真集新装版「薔薇刑」を見る

図書閲覧コーナー

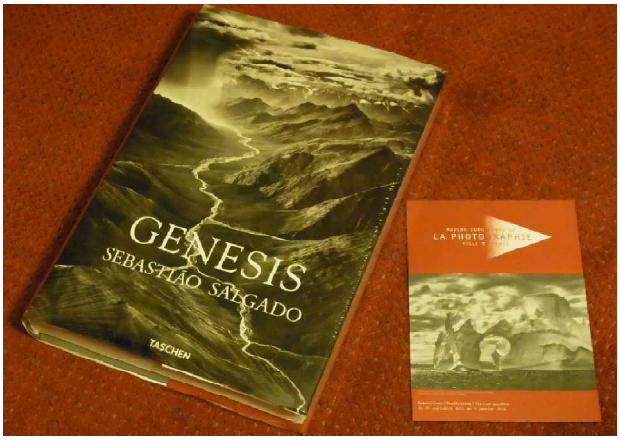
映像閲覧コーナー

100 人ぐらい収容できるホールが併設されている

写真集などミュージアムグッズの売店



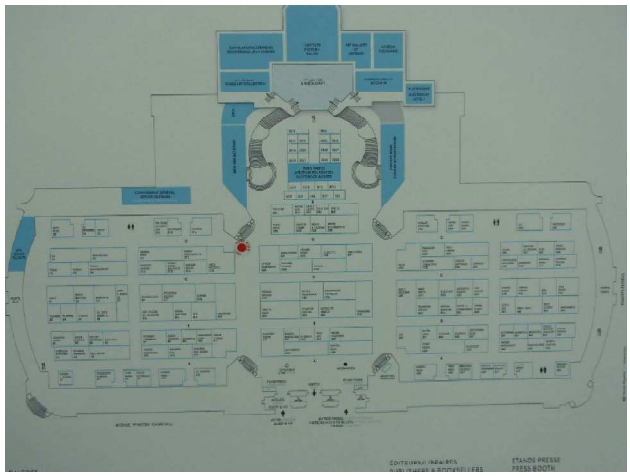
セバスチャン・サルガドの作品展示。5 室ぐらいに分かれて展示されている

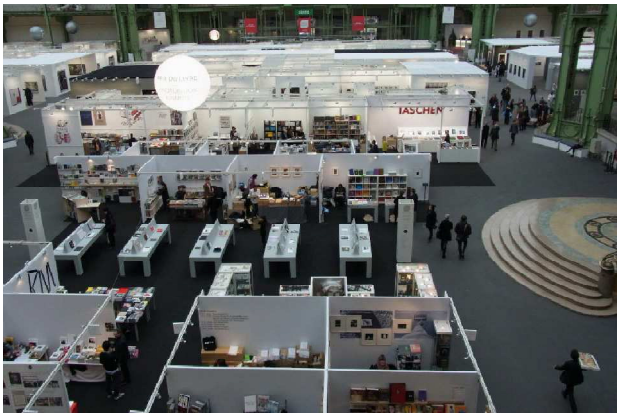


サルガドの写真集「GENESIS」と写真美術館のパンフレット

写真美術館の入り口で入場を待つ人

グラン・パレ。雨にもかかわらず開館前には列ができてた


パリフォト会場全体の見取り図



会場全体を上から見る

MAGNUM のブース

■パリフォト

パリフォト（PARIS PHOTO）は、世界の写真ギャラリーが主に集い、作品の展示、販売を行うことを主としているが、関連の出版社や書店なども出店している。

パリフォトの開催されるグラン・パレ（Grand Palais）は、1900 年のパリ万博のために建てられた、ガラス屋根の大型展示会場だ。地下鉄のヴェルサリーエ駅から近く、オープンの 15 日は、朝からあいにくの雨だったが、駅を降りて徒歩約 10 分ほどでグラン・パレ前に到着した。

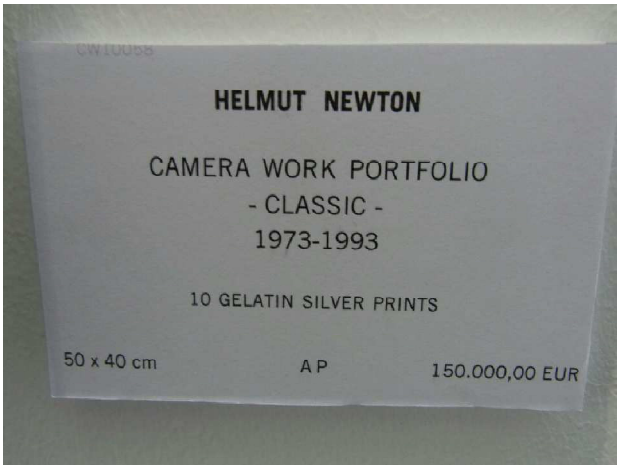
グラン・パレ前には雨にもかかわらず多くの人が 11：00 の開館を待っている。ここで、CIPEC の Prove 氏と待ち合わせして中に入り、パリフォト事務局 Reed Expositions の Michel Filzi 氏から概要を聞くことができた。

今回のパリフォトには、136 のギャラリーと、28 の書店・出版社が出展しているそうで、会期中にはコレクターやバイヤー、さらには写真家を目指す若者たちが世界中から集まってくる。パリフォトを主催しているのは、フランスでイベントや出版を手がける Reed Expositions 社である。

日本の 1970 年代の写真書籍を売るコーナーもあった

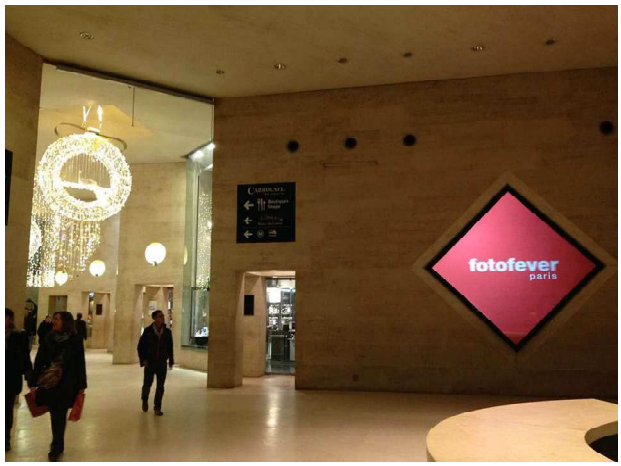
日本からのギャラリー、出版社の出展は 10 社ぐらいだろうか。売買を対象とした日本人作家の作品も多く見かける。著名な森山大道、杉本博、大和田良などの大型プリントはいったいいくらで取引されているのだろうか。価格は公にされていないが、一般的な作家で 8 × 10 ぐらいだと、4 万円から 40 万円ぐらいと幅が広く、それ以上高額に設定されている作品は、簡単にいくらでも探し出すことはできる。

会場内には、自分の日本で発行した本を持参して、販売コーナーで販売したり、サイン会を開いたりする日本の写真家、さらには日本人の団体ツ



ヘルムート・ニュートンのポートフォリオ10 枚セットが150.000,00ユーロと値付けされていた

会場わきの階段に座り込んだ若者の首には一眼レフカメラがさげられているが、写真学校生だろうか？



フォトフィーバーの入り口

アー客もいたりして、昨今の日本でのパリフォトのブームを実感できた。パリフォト2013の入場者数は、55,239人と事務局から発表されている。また、この場でどのような作品がいくらで販売されたかは公開できないという。

<関連URL>http://www.parisphoto.com/

■パリフォトの周辺

パリフォトというと、本来は上記「パリフォト」そのものを指しているが、最近ではほぼ同時期に写真関連のイベントがいくつか打たれており、それらをまとめてパリフォト、さらにはこの期間は一般ギャラリーでも写真の展示を行うので、それらを総称して“パリ写真月間”“パリフォト”などと呼ぶようになっている。そのうちのいくつかを紹介しよう。

□フォトフィーバー

パリフォトとは別に「フォトフィーバー・フォトグラフィー・アート・フェアー（fotofever photography art fair)」というパリフォトの規模を小さくしたような展示会がルーブル美術館ガラスのピラミッドの地下、ルーブル・カローセルで15日から開かれた。その前夜祭が14日の18：

9 月、日本の“東京フォト”でも同じ作品が展示されていた

銀座柴山画廊のディレクター小林貴氏（左）とスタッフ

00からあるので、事前に日本の出展ギャラリーから前夜祭のVIPカードを入手していたので見学した。フォトフィーバーは出展料も安いということもあり、パリフォト同様に日本からギャラリーや出版社の参加が多い。

内容的には、まさにミニ・パリフォトといった感じだ。ギャラリーが52コマ、出版社が11コマ、その他関連ブースが7コマということだが、全体的に小ぶりに設定されてはいるが、個人のコレクションブースが開設されていたり、見る側にとっては気楽さがあった。

<関連URL>http://www.fotofeverartfair.com/

□LensCulture FotoFest 2013

表にはなかなか見えないが、若い人の写真作品の売り込みの場として写真を見て評価してくれるレビューなども活発に行われ、新しい写真家の登竜門にもなっている。“LensCulture FotoFest 2013”は11月の11日から13日の3日間にわたって行われたが、レビュアー（評論家）は44人おり、受講者はあらかじめ渡されたリストに、お気に入りをレビュアー25人に順位をつけて申し込むと、3日間の間にリクエストした人から講評を受けられるように組合せを決めてくれるという。

フランス写真博物館のあるビエーブル駅のホームにて

ビエーブル駅前の標識と駅舎

レビュアーは、写真のディレクター、編集者、写真家などで、ロシア、ブラジル、ドバイ、韓国、インドなどの人もいるが、そのほとんどは欧米人だ。44人もレビュアーがいても、日本人のレビュアーが1人もいないのは言葉の障壁が意外と影響しているのかもしれない。

実際、このレビューに参加した日本人女性の話では、自らの語学力不足を痛切に感じたという。2013年は、40カ国から175人以上の写真家やレビュアーが参加したという。

<関連URL>http://fotofest-paris.com/

■フランス写真博物館

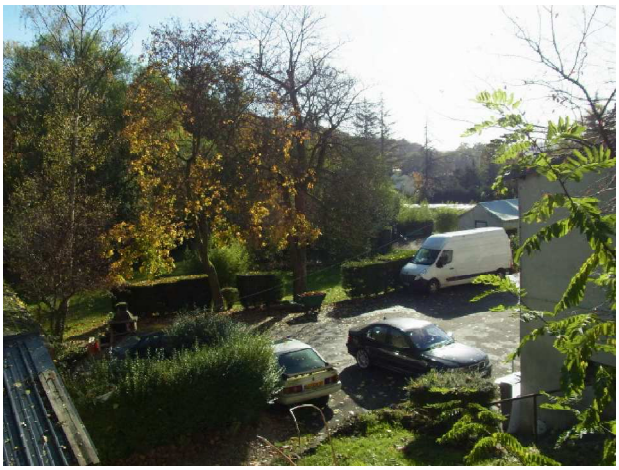
パリ市内から列車で、マッシー・パレゾーという駅で乗り換えて、ビエーブル駅に行く。ビエーブルの町には、フランス写真博物館（French Museum of Photography）がある。このフランス写真博物館の情報はきわめて少なく、Webで検索してみると、1990年に東京・八王子の富士美術館で開催された「ビエーブル・フランス写真博物館展」の情報があるぐらいだ。また10年ほど前には、毎年6月の第1日曜日になると、この町の広場や路上で中古カメラ市が朝早くから立つので、一部日本のカメラファンにも有名な町だが、これも知る人ぞ知る情報であり、わずかに中古カメラ市に行った人がブログに書き込んでいる程度だ。私自身は、1985年にフランス政府の招きで、フランスの写真工業界を視察に出向いたことがあるが、その時のツアーにこのフランス写真博物館訪問が組まれていたので、実に28年ぶりの再訪となる。

マッシー・パレゾーで乗り換えると、わずか10分ぐらいでビエーブルの駅に着く。駅前の案内にも写真博物館は出ている。道は駅から幹線で1本道だが、歩いても、歩いてもなかなか到着しない。日本人の書いたブログには駅から10分ぐらいでフランス写真博物館に着くとなっていたが、かなり競歩の感じで歩いても、約20分ぐらいは楽に必要とした。たぶん車での所要時間だったのだろう。

やっとの思いで到着したら、なんと2014年の1月中旬まで休館している。このフランス写真博物館は、もともとフランス人のファージュ親子が1949年に始めた小さな私設写真博物館だった。これは父親の個人コレクションや町の写真クラブが集めたコレクションを展示し、その後ビエーブル市も協力して市立博物館となり、さらに県も協力して県立のフランス写真博物館となったという。

私が1985年に訪問したとき年配のご夫婦が出迎えてくれたが、それがファージュご夫妻だったのだろう。この博物館のコレクションは、カメラと

写真博物館への案内は時々あるが、かなり先だ


写真博物館の庭を垣根越しに撮影

古い写真だったと記憶している。

庭には池がありアヒルが泳いでいて、館内でおばあさんが古写真を修復していたのをいまでも克明におぼえている。1985年当時、帰国後写真入りの特別展の案内を何年間か送ってもらっていたが、1990年に日本の富士美術館で特別展があったころが最盛期だったのかもしれない。

ちなみに、あくまでも推測であるが、こちらがフランス写真博物館であるために、パリ市内のはヨーロッパ写真美術館と名づけたのかもしれない。

<関連URL>http://www.muselia.com/france/bi%C3%A8vres/french-museum-of-photography/1727

■アンリ－カルティエ・ブレッソン財団

アンリ－ カルティエ・ブレッソン財団{Foundation H・C・B (Henri-Cartier Bresson)}の美術館は、滞在していたホテルの近くにあるモンパルナス駅から歩いて15分ぐらいの所にある。

アンリ－カルティエ・ブレッソン(1908～2004年）は、20世紀を代表するフランスの写真家であるが、日本へも何度か来ており、国際的な写真家集団であるMagnum Photosの創設メンバーの1人である。

<関連URL>http://www.henricartierbresson.org/

こじんまりとしたビルの1階～3階までを使ってアンリ－カルティエ・ブレッソン財団はある。各フロアーは狭いが、かなり多くのが人が訪れていた

■その他のギャラリー

残りわずかな時間を利用して日本人写真家の鬼海弘雄氏（土門拳賞、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、さがみはら写真賞、APA 賞特選などを受賞）が、写真展「ペルソナ」を開いている3区にある“インビトウイーンギャラリー”へ行った。

幸い、ヨーロッパ写真美術館のある地下鉄サンポール駅から徒歩15分くらいの距離なので、ヨーロッパ写真美術館を見た後に時間があればのぞいてみるのもいい。今回は、事前に鬼海氏が、この期間にインビトウイーンギャラリーで個展を開いているのを調べていたので訪れたが、事務所で訪問を告げると突然の日本人の来訪に、ご本人はびっくりしたようだ。古くから知り合いなので、一緒に記念写真に納まってもらった。鬼海氏は、パリフォトの開催を前に13日には帰国した。

このインビトウイーンギャラリーは、2013年3月にスタートしたということだが、オーナーのLuigi氏は日本びいきのようで、多数の日本人作家、それも若い人たちを主に招聘している。

<関連URL>http://www.inbetweengallery.com/#

■終わりに

実は、私は1985年の5月にフランス政府の招待を受けて、その年の10月に開かれる「第36回パリ国際フォト・シネマ・ビデオ展」の前座としてフランスの写真企業を見学したことがある。

訪れた会社は、キスフランス（KIS FRANCE、ミニラボ機器）、ポッソー（POSSO、VHSケース、写真収納箱）、アンジェニュー（ANGENIEUX、交換レンズ）、プレスチノックス（PRESTINOX、スライドプロジェクター）、パノディア（PANODIA、写真整理用品）の5社で、このほかにパリ写真博物館が含まれていた。今回の訪問を機に、その後の各社の動向を調べてみたが、最新のサロン・ド・ラ・フォトの出展者リストから探ってみると、唯一キスフランス社だけが出展してた。その他Webなどで調べたが、1社を除きそのほとんどが現在も存続しており、関連事業を継続しているのが興味深い。

ちなみに1983年のパリ国際フォト・シネマ・ビデオ展は、同じパリ・エキスポ、ポルポトベルサイユで開かれ、規模は、出展企業：253社、外国企業：51社（22ヵ国）、出展ブランド：457、入場者：150,000人、会場面積：33,000平米であったと、発表されている。今からちょうど30年も前のことであるが、写真もフィルム全盛の時代であり、ちょうど静止画用のSVシステムがキヤノン、ソニーから立ち上がろうとしていたタイミングだ。

パリに限らないが、海外のギャラリーは外から中の展示がわかるようになっているのが多い。ガラスにはHiroh KIKAIとプリントされている

鬼海弘雄氏（左）とペルソナ作品の前で

今回のサロン・ド・ラ・フォトを同じように分析することは不可能だろう。たとえば、企業が日本のメーカーであっても、現地法人で出展していれば、フランス企業となるわけであって、企業のグローバル化は単純に当時と比較するのは無理だ。しかしながら、変わらないのは一般ユーザーが写真に寄せる熱い思いであって、その結果として、サロン・ド・ラ・フォトの開催が毎年となったのは、デジタルの時代を迎えて製品サイクルが早くなっていることにも関係あるだろうが、同時期に行われたパリフォト、フォトレビューのにぎわいを含め、写真の楽しみ方がハードだけでなくソフトも含めた方向へいくのではと思う次第だ。これは、フランスがということではなく、近い将来日本も同じような道を歩むのではないだろうか。

今回のパリ写真事情視察は、カメラ映像機器工業会のCP＋2014プロジェクトチームに同行しての結果であり、プロジェクトチームリーダーの寺田俊夫氏、ならびに同行のスタッフの皆様には一方ならぬお世話になったことを、この場を借りて厚く御礼申し上げる次第です。

〔参考文献〕フランス写真工業事情、写真工業、1985年9月号